

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	齋藤 隼人
論文題目	概念メタファーとマルチモーダル・メタファー研究 —日本の文化・社会に関する題材を中心に		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、認知言語学の概念メタファー理論に基づき、社会の広範な事象の根底にある構造やメカニズムを明らかにすることである。時間や感情といった抽象的概念が具体的な身体経験に基づくメタファーによって理解されるという概念メタファー理論の見方を本論文は発展させ、政治や歴史、文化における諸現象をメタファーの観点から統一的に分析することを目指した研究である。本論文は 6 章から構成される。</p> <p>序章に続く第 2 章では、本研究の理論的背景として、概念メタファー理論と「マルチモーダル・メタファー」を中心に概観している。マルチモーダル・メタファーとは、絵画、ジェスチャー、音楽など複数のモードに発現するメタファーであり、概念メタファーの心理的実在性を立証する現象として認知言語学において近年注目されており、第 4 章以降で扱う事例の多くもマルチモーダル・メタファーに相当する。さらに本章では、言語の意味と概念の関係を分析するための枠組みとしてプロトタイプ・カテゴリー理論、フレーム意味論、概念ブレンディング理論といった主要な理論を導入する。最後に心理学・精神分析学における「概念」の取り扱いにも言及し、第 4 章以降での分析の基盤を構築している。</p> <p>第 3 章は、概念メタファー理論をイデオロギー、教育、メディア、政治などの研究に適用する事例を概観している。概念メタファーは言語表現に限らず意識や行動にも反映され、それゆえこれらの社会的事象と密接な関わりをもつことを示す。また、政治的ディスコースをメタファーの観点から分析した「批判的メタファー分析」および関連研究を概要している。さらに本章では、メタファーの持つ効果の問題を取り上げ、メタファーにおいて視覚的情報が優位に利用される傾向にあることを、メトニミーの特性にも言及しつつ論じている。</p> <p>第 4 章は、概念メタファー理論が政治社会および歴史の研究に対して有効であることを示す事例研究として、日本統治時代 (1895 年～1945 年) の台湾で発行された新聞に掲載されていた「臺日漫画」を題材として取り上げる。日本統治時代の</p>			

台湾は、日本の思想・文化を相対的に捉える上で重要な位置づけにある。当時の政治的・歴史的背景に照らし合わせながら、風刺漫画に反映されている様々なメタファーを分析することにより、日本と台湾、国際社会との関係性をつまびらかにしている。4.1 節では、日本統治時代最大の先住民族による蜂起事件である「霧社事件」を描いた一連の漫画を取り上げ、その中に描かれた人間や動物、書き込まれた文字から通底する概念メタファーを紐解き、この事件の背景要因を明らかにしている。4.2 節では、抽象概念を具象化する概念メタファーである「存在のメタファー」および擬人化のメタファーの観点から漫画を分析し、「魅力的な女性」や「娘・息子」として描写される台湾について考察している。4.3 節は文化的・社会的コンテクストとメタファーの解釈について取り上げ、例として「小さなこども」として擬人的に描かれた日本についての考察を行うなど、普遍的と思われる概念に対して文化的な価値づけが行われていることを指摘し、文化的コンテクストの重要性を示唆している。4.4 節では心理学的アプローチによるメタファーの分析を試みており、国家としての日本を擬人化して描くメタファーを「こども」「青年」「大人」という発達段階の点から分析する。

第 5 章は現代日本社会における文化と社会性を中心的なテーマとし、日本文化論の先行研究に基づきつつ、概念メタファー理論から新たな視点を示している。具体的には、昭和の流行歌の歌詞にみられる概念メタファーを同定し、当時の「金銭」「規律」に対する価値観を分析する。さらに、小津安二郎の映画に描かれる「家族」「時間」を概念メタファーから分析し、そこにどのような価値体系が見いだされるかを考察している。

第 6 章は本論文全体のまとめである。概念メタファー研究の社会的意義を述べるとともに、今後の研究の展望について述べている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は概念メタファー理論の適用範囲を拡張し、多様な事象をメタファーの観点から一貫して分析し、新たな観点を提示した意欲的な研究である。本論文は以下で挙げるように、大きく3点において評価することができる。

第一に、本論文は概念メタファー理論を政治的・社会的事象へ適用した研究として成果を上げている。従来の認知言語学でのメタファー研究は、語の多義性や意味拡張といった現象を主な対象としてきたが、近年は談話やテキストとメタファーの関連性が注目されつつある。本論文はそのような認知言語学の潮流を取り入れ、政治や社会というコンテクストにおけるメタファーを観察・分析することでそれらの根底にあるメカニズムの解明を志した、価値ある研究である。実際に、概念メタファーの提唱者である **George Lakoff** は現在、アメリカ合衆国の政治家の発言や言説の中の比喩的表現を積極的に分析し、その思想を明るみにしている。本論文も同様に、イデオロギーや社会構造の解明に概念メタファーによる言語学的アプローチが有効であることを示唆するものである。

第二に、本論文はマルチモーダル・メタファー研究としても評価される論考である。認知言語学ではマルチモダリティへの関心が近年著しく高まっており、国際的にも非常に活発な議論がなされている。特に、概念的な次元のメタファーは言語だけではなく視聴覚的な表現モードにも発現するため、メタファー研究におけるマルチモダリティへの関心の高まりは必然的とも言える。日本国内において、マルチモーダル・メタファーの研究事例は現在のところ散発的にとどまっており、そのような中で本論文は風刺漫画や流行歌、映画といった多種多様な題材を分析対象とした先駆的な取り組みであると言える。

特に、第4章で展開されている、日本統治下の台湾における風刺漫画の一連の分析は、申請者が4年間にわたり国立台湾大学に滞在し、マルチモーダル・メタファー研究で知られる **Wen-Yu Chiang** 教授より助言を受け研鑽を積んだ成果があらわれている。当時の新聞の風刺漫画に描かれた様々な情報を解釈し歴史的資料を読み解く上で、申請者が有する豊富な歴史的・社会的知識と高い中国語力が如何なく発揮されており、個々の事例に対し興味深い考察がなされている。

第三に、本論文の特筆すべき点として、研究の射程の広さが挙げられる。言語学のみならず社会学、心理学、精神分析学、日本文化論といった諸領域の知見を駆使しながら広角的な視座から現象を観察し、独自の洞察を得ようとする申請者の研究姿勢が随所で見受けられる。このような学術的関心の幅広さにより、本論文は申請者でなければ成し得ない、独創的研究となっている。

一方で、本論文には次のような課題も残されている。まず、対象とする現象の幅広さゆえ、個々の現象について考察が深めきれていない箇所があることは否めない。さらに、本論文が概念メタファー理論に対してどのような貢献をなし、どのような点に限界があるかといった、理論的なフィードバックには不十分さが残る。また、新規の概念メタファーを申請者自身が提唱する際に、なぜそれがメタファーと認定されるのか、論拠が明確でない場合がある。以上の点については、今後の申請者の取り組みによる改善と発展を期待する。

以上、本論文は、概念メタファーを通して社会の諸側面に果敢に取り組んだ独創的な研究として高く評価することができる。本論文で示されたアプローチはさらに様々な応用が可能であり、今後の言語学及び関連諸領域への貢献が期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年6月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降